

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4572100859		
法人名	有限会社 ほほえみの里		
事業所名	グループホームほほえみの里	ユニット名	牧水館
所在地	宮崎県日向市東郷町山陰甲697番地5		
自己評価作成日	令和4年12月14日	評価結果市町村受理日	令和5年3月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_topiigvosyo_index=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	令和5年1月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

周囲を山に囲まれて、自然豊かな環境を楽しめる施設です。季節の移り変わりを身近に感じることができ、鳥や虫など生き物の活動も感じることができます。施設周辺には山菜もあり、散歩の途中で収穫したりすることもできます。新型コロナウイルス対策もあり、地域住民との交流に機会は限られていますが、散歩時の交流や野菜、果物などの差し入れを頂くことがあります。施設内行事では2ユニットそれぞれが趣向を凝らし、最近では食事を楽しむことを目的とした行事に力をいれております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍において、外出が制限される中、近隣へのドライブや花見、ホーム周辺の散歩等、感染対策を踏まえた上で外出支援を行い、利用者と職員双方の気分転換を図っている。管理者の提案で、食を楽しむ支援として、屋外での焼き鳥祭り、お好み焼き、餃子作りと毎月のようにイベント食事を開催している。おでんの時はメニュー表を掲げ、利用者は好みのおでんを選んでいる。ノンアルコールビールの提供もあり、雰囲気作りに努めている。管理者と職員は、理念の意義や役割の理解を深め、笑顔で寄り添い、利用者の思いや希望に気づくための研修も行っている。短歌作品展に応募するなど、意欲を引き出す工夫もしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念については毎月の全体会議で確認を行っている。館内掲示やブログにも挙げており、理念の共有を行っている。理念を達成するための基本方針を策定し、これも毎月の全体会議で確認を行っている。	管理者と職員は、理念をホームの指針として、毎月振り返りを行い、課題について話し合っている。利用者一人ひとりの安全と安心に配慮したケアの実践に取り組んでいる。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の回覧板グループに入っており、毎月情報提供を受けている。新型コロナウイルス対策もあり、地域行事への参加は困難な状況が続いている現状がある。施設周辺の散歩で近隣の方と挨拶や会話などのコミュニケーションは行っている。区長や民生委員とは運営推進会議での交流がある。	自治会に加入しており、回覧板は利用者と一緒に見ることで、お知らせや行事等確認している。昨年台風時に数日間断水したが、地域住民より水の提供があった。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に活用している	地域への認知症講座等の取り組みは新型コロナウイルス対策や提供場所の関係もあり実施できていない。入居者の家族が近隣に居住されていることもあり、施設での取り組みや認知症の方の対応について話を伝えることは行っている。包括支援センターが主催する地域会議への参加を行った。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回運営推進会議を実施しているが、新型コロナウイルス対策のため書面会議での対応が主となっている現状がある。運営状況やリスクマネジメント、感染症対策等報告を行い、意見を伺った上、今後の取り組みに反映させている。会議内容については会議録を作成し、職員が閲覧できる状況を作っている。	書面会議であるが、ホームの運営状況や事故等また、利用者の日常生活の様子も詳しく報告している。今は意見等は伺えないが、開催が可能になった時、会議の進行がスムーズに行うことができるように準備を進めている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議での関わりをはじめ、リスクマネジメントや感染症対策など、必要時には電話連絡や直接窓口へ赴き相談を行っている。メールでも情報提供を受けており、円滑な連携はとれていると思われる。	担当者との連絡相談は密に行われている。コロナ禍や災害時の物資等の支援も早急に対応をしてもらっている。感染症対策や事故報告についても指導、助言を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所として身体拘束廃止宣言を掲げている。身体拘束に関する指針の整備、身体拘束適正化委員会の設置を行っており、年2回の施設内研修、3ヶ月に1回の身体拘束適正化委員会の開催を行っている。スピーチロックには特に力を入れており、認知症の方にストレスを感じさせない言葉掛けを目指している。	管理者は、利用者の特異な言動について、行動の抑制につながらない言葉のかけ方や接し方など、職員が共感理解が出来、利用者の思いにそって支援できるように日頃から実践に努めている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止については研修開催が義務化されることもあり、施設内研修に組み込み、全員が受講した。身体拘束研修や身体拘束委員会でも虐待防止について取り上げ、職員の意識、理解の向上に努めている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ユニットには実際に日常生活自立支援事業や成年後見人制度を利用されている利用者があり、職員も身近に感じる環境はある。施設内研修で権利擁護事業について取り上げたこともある。金銭管理や契約管理を行っていることは理解できている。権利擁護事業が必要と感じられれば関係機関との連携、相談を行っている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規契約については、施設見学時や問い合わせ時から要点を伝えるよう努めている。契約については入所当日ではなく、事前説明の機会を設けることで疑問点や不明点について問い合わせに対応できる状況を作っている。改定時等は書面や電話で家族に連絡を行っている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営会議には家族代表の方に参加頂いている。普段の面会時には、相談等が行いやすいように話しやすい環境作りに努めている。新規契約時には疑問や不満は小さいうちから解決するのがよいことを伝え、遠慮なく相談して頂くよう伝えている。寄せられた意見等については申し送りや全体会議で職員へ伝えている。	ホーム便りは、家族とのコミュニケーションツールの1つとして、日常生活の写真を中心に、個別の健康状態やお知らせ等、面会制限がある中でも、利用者の暮らしが伝わるよう工夫している。利用者の伝言欄もあり、家族からの返事を聞くこともあり運営に反映させている。		

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の全体会議やユニット会議を行うことで職員が意見を挙げる場を設けている。直接、相談を受けるケースも多く、話を聞く環境については配慮を行っている。施設設備面等の意見については代表者へ報告し、改善に努めている。	毎月2回の会議の中で出された意見を反映し、床や壁の補修が行われている。資格取得においても相談援助を行っている。今後、外部研修の機会を積極的に設け、職員の資質向上を図る予定である。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすい環境を整える取り組みとして希望休相談対応を行っている。勤務状況や取り組みについては代表者へ報告を行っている。処遇改善加算など、反映できるものは積極的に導入を行っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画で施設内研修を決定しているが、外部研修への参加は随時検討を行っている状況である。日常のケアについては都度対応の指導等を行っている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宮崎県グループホーム連絡協議会に加盟している。地域の会議に参加したり、Web研修や会議で交流を行っている。職員の外部研修の機会が少なく、現場レベルでの交流の機会がはかれない状況がある。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所相談の時点で必ず本人と面談が行えるよう相談を行っている。新型コロナウイルス対策もあり、複数回の面談は困難であり、いきなり施設職員の面会を受けることで戸惑いがみられることもある。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所相談に至るまでの経緯や家族の不安などを傾聴し、家族の思いも尊重しながら話を聞くように努めている。認知症面の相談が多くあり、理解や対応が行いやすいようアドバイスを行ったりしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームの機能や役割を伝え、その中で本人がどのように暮らしていくのかを第一に考えることを伝えている。必要なサービスがあると感じた時はその根拠やサービス内容等を伝えている。			

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は会話の機会を多くもっている。家事活動を中心に共に going していくことで、施設内の空間において共に過ごしているという意識を持っている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族面会時はゆっくりと過ごせるよう環境への配慮を行い、介護職員も話の輪に入るよう努めている。施設での生活をお便りや訪問時に伝え、家族に協力してもらえそうな部分についてはお願いを行ったりしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所時のアセスメントで馴染みの場所や行きつけのお店、趣味等の確認を行っている。新型コロナウイルス対策もあり、外出は控えている状況が続いている。普段の会話で話題として取り上げたりして本人が思い出せるような状況を作っている。家族以外にも親戚や知人の面会も受け入れているが、新型コロナウイルス対策の為、現在は難しい状況もある。	コロナ禍の中、人との往来も少なくなり、馴染みの関係が低下してきている。家族からの情報や日常での気づきから、馴染みの支援を探し、実現に向けて取り組んでいる。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活の中で、個性や性格などへの配慮からテーブル位置や座る場所などの配慮を行っている。会話が噛み合わない場合や難聴のケースは職員がフォローを行っている。入居者同士がお互いの居室を行き来することもあり、話しやすい環境が持てるよう支援を行っている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に戻られたり、病院への長期入院となるなどのケースがあった。家族や担当者から必要に応じて情報を求められたりするケースがあり支援を行った。退所後も各種サービスについて情報提供を行ったこともあった。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当介護職員を中心に日々の暮らしの中で本人も思いや意向を汲み取ることに努めている。ケアマネージャーは定期的に面談を行うことで本人の意向を把握。意向の確認が困難な場合は家族への相談を行っている。	職員は、優しくゆっくりのケアを心掛け、利用者の表情や仕草に気づくことで、共有して支援につなげている。家族から、外での作業を好んでいたとの情報を得、本人の意向も組んで支援に取り入れたところ、ADLの低下抑止につながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時のアセスメントで生活歴の確認を行っているが、情報が十分に入手できないケースもある。日常で気付いたことや過去のサービス関係者などからの情報を加味し、作り上げている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	施設での生活は毎日同じような日課を繰り返している状況がある。その中で一人一人の状態把握を行っている。状態の変化について報告や相談が行われているが、十分共有が図れていないこともある。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネジメントでは毎月のモニタリングを行っている。担当介護職員は半年に一度の見直し時にモニタリングを行い、ケアマネジャーと内容確認を行っている。家族へは施設での生活など近況の報告を行い、意向の確認や必要なサービスについて確認を行っている。サービス担当者会議は新型コロナウイルス対策もあり、本人と施設関係者のみでの開催が主となっている。家族へは会議録での報告を行っている。		毎月モニタリング、アセスメントを行い、毎日の介護記録も参考に担当者会議を開いて、計画見直しを図っている。職員は計画書をいつでも見ることが出来、支援の共有に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録面が弱く課題となっている。記録について研修を行い、スキルアップを図ったが、日々の生活の様子や変化、経過状況など不足していると感じる部分も多い。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームでの対応ができるのか判断し、対応が難しい場合は他のサービスの提案や状態に応じた施設サービスの提案などを行う。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源については包括支援センターに相談を行う。運営推進会議には民生委員や区長も参加されており、情報収集できる状況であるが、新型コロナウイルス対策の為、対面での会議は控えている状況が続いている。月1回の回覧板にある市報や県報、その他情報誌も確認を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居契約時に本人や家族に協力病院の説明を行っている。現在の主治医へ相談し、問題ないようであれば医療面の支援をより円滑に行えるよう協力病院へ移行することもある。基本的には本人、家族の意向に応じて受診支援を行っている。	現在、受診の支援は職員が行っている。コロナ感染や台風災害などの緊急時においても、協力医の適切な対応が受けられた。コロナ感染で、健康管理下にある間は、協力病院の感染症対策看護師の協力で、毎日職員の抗体検査が実施された。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内には看護職員の配置はなく、医療面のケアについてはケアマネージャーへ相談し、協力病院に連絡、相談を行っている。介護職員へは変化に気づきやすいよう、病状変化の状態などを伝えている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際には日向・東臼杵地域入退院支援のための情報共有連絡票を使用している。新型コロナウイルス対策のため、面会が困難であるケースが多く、病院の地域連携室ケースワーカー等と連携し情報収集を行っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に看取りに関する事前確認書で説明を行い、意向の確認を行っている。施設での看取り介護は体制面からも困難であることを伝え、協力病院や医療機関への入院対応になることを伝えている。病状の進行に応じて、家族や医師、病院の地域連携室やケースワーカーへ相談を行っている。	看取りは行っていないが、終末期については関係者との方針の共有の確立に向けて取り組んでいる。現在1名の方が重度化しているが、定期的に受診を行いながら、その都度医師、家族、ホームとの話し合いを持ち、支援の共有を図っている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急対応ハンドブックを常備し、急変時マニュアルの整備を行っている。全体会議内で、救急対応についての実際の体験を通じた振り返りを行っている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を設定している。防災訓練は年2回実施している。実際に台風被害による停電、断水の経験もあり、それらを通して必要物品の再確認を行っている。備蓄は定期的に確認し、交換を行っている。	定期的に訓練は実施しているが、実際に災害に遭ったことで、停電対策の見直しを行い、発電機や投光器の設置、また食品等の備蓄品の整備を行った。現在防災士は配置していない。		

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーへの配慮は入居者の権利を制し組み込んでいる。虐待防止研修でもプライバシーへの配慮は取り上げた。言葉掛けについては身体拘束適正化委員会や施設内研修でスピーチロックをテーマに取り上げるなど、職員が適切な言葉使いを意識できる機会を設けている。	プライバシー保護のマニュアルを作成しており、利用者への言葉かけや対応にも全職員で取り組んでいる。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者への意向の確認を行う言葉掛けを行っている。行事やレクリエーションにおいて、選択肢を提供できるようメニュー等工夫を行っている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎日日課として行っている活動の中で、本人のペースに合わせて参加や取り組みの意向確認を行っている。入居者自身が流れに任せている状況もあるが、入浴の時間や食事の時間は一定の対応にはなっている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類については確認が出来る方には本人と一緒に服を選んでいる。整容については訪問理容を活用しており、本人の希望を確認しながら散髪を行っている。化粧品の購入希望がある時は家族へ相談を行っている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者それぞれの嗜好を把握し、誕生日には本人の食べたいものをメニューにし、全員で食事を楽しんでいる。配膳や調理、下膳、食器洗いなどではできる入居者に手伝ってもらっている。	利用者の誕生日には、食べたい物や飲み物の希望を聞き取りして提供している。利用者は職員と共に食材の皮むきやおやつ作りにも出来る事で参加しており、食事が楽しめるよう支援に取り組んでいる。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	協力病院の管理栄養士に献立を立ててもらっており、4週間でワンセットとなっている。腎機能低下や糖尿病対応については医師の指示に従って、塩分調整等を行っている。主な調整は汁物半量や漬け物を控える、おやつ類の制限を行っている。食事、水分摂取については毎食チェックをおこなっており、少ない時には促しを行うなど対応。刻み食やミキサー食対応も行っている。			

宮崎県日向市 グループホーム「ほほえみの里」(牧水館)

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性はサービス担当者会議や全体会議で伝えている。毎食後の声掛け、促しを行っているが、習慣的にできない方については洗面台まで誘導を行うなどしている。残渣物が残っている時はその都度声掛けを行い、実施する場合もある。歯科受診を定期的に行っている方もおり、受診の際に歯科衛生士からアドバイスをもらうこともある。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的にトイレ誘導の声掛けを行っており、トイレ自立の方に対しては口頭での確認を行っている。排泄チェック表を活用し、排泄パターンや間隔の把握を行っている。失敗時にはプライバシーや羞恥心への配慮を行う。機能的失禁に対してはパッドの活用も行っており、夜間帯は安心して休むことができるよう支援を行っている。排泄状況についてはサービス担当者会議やモニタリング時に確認、相談等を行っている。	排泄チェック表を利用している。利用者に合わせ、声掛け誘導を行い、トイレでの排泄支援に努めている。夜間ポータブルトイレの利用者もいるが、安全対策も図り支援している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況の把握は排泄チェック表で行っている。自立の方については口頭での確認を行っている。家族へ過去の状況の確認を行うこともある。便秘が続くときは医師への相談を行い、下剤の使用を行うこともあるが、便性状を確認し、必要に応じて相談、調整を行っている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	職員配置や他業務の兼ね合いもあり、入浴は主に午後からの対応となっている。毎日平均3人程度の入浴対応を行っている。順番にこだわる方もおられ、他入居者への配慮を行いながらなるべく希望に添えるよう対応を行っている。	利用者のその日の気分に合わせて、声かけ誘導をしている。入浴拒否がある時は、時間をずらしたり、時には清拭にて対応している。季節を感じるゆず湯や、菖蒲湯も楽しめるように支援している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ホールには大きめのソファを2台設置しており、思い思いに休める環境を作っているが、座る位置にこだわりを持つ方もおられ、職員のフォローが必要な場合もある。傾眠がみられる時は居室での休息を勧めたり、午睡を習慣的に行っている方もいる。			

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報は各個人の台帳にファイルしており、いつでも確認できる状況を整えている。受診後は最新の薬情報を提供し、職員間で共有している。受診報告書に薬剤師からのコメント欄を設けている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事活動が主ではあるが、掃除や調理、洗濯物などできる活動には積極的に参加できるよう声掛けや促しなどを行っている。園芸活動や短歌作成の支援も行っている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設周辺の散歩は随時実施している。新型コロナウイルス対策もあり外出は控えている状況が続いているが、屋外へのドライブを季節に応じて行っている。車いすや歩行器使用の方も一緒にドライブに出かけている。	コロナ禍で思うような外出支援はできないが、園庭での散歩や、付近の散歩支援は行われている。近隣のお宅の犬に合うことも利用者の楽しみとなっている。ドライブ支援も行われており、人の少ない所を選び、気分転換を図れるように支援している。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭所持の希望がある方については対応を行っている。生活費としての金銭は家族にも相談を行い、少額を事務所で管理しており、外出時や物品購入希望がある時は対応している。管理状況は定期的に家族へ報告を行っている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話希望時は事務所で電話対応を行っている。外部からの電話取次も行っている。受診等外出先から公衆電話を使用したこともあった。手紙は本人希望時は準備等支援を行っている。毎月の家族宛の介護便りに本人が記入する取り組みも行っている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花を飾ったり、季節に応じた工作や作品づくりを行い、それらを展示、掲示するなどして季節感を演出している。ホールは夕方から夜間帯にかけては照明機能の関係でやや暗い感じがある。近隣に養鶏場が多く、夜間帯は大型トラックの走行音が響くことがあり睡眠に影響を与えることがある。代表者へ相談を行い、徐行の協力を行ってもらっている。	共用空間は、それぞれのユニットで利用者の個性や好みに合わせ、テーブルやソファの配置を工夫している。テーブル上にパーテーションを設置することで、感染防止に配慮している。温度、湿度、換気も適時にチェックし管理を徹底している。		

自己	外部	項目	自己評価	牧水館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールには大きめのソファを2台設置しており、思い思いに過ごせる環境を整えている。新型コロナウイルス対策でテーブルにはパーテーションを設置しているが、入居者もその状況には慣れてきている感じである。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居契約時に準備リストを手渡しているが、それ以外にも本人や家族に思い出の品や使い慣れ親しんだ物を持参することを勧めている。入居前のアセスメント時に可能な限り自宅内の環境を確認させて頂き、雰囲気作りの参考にしている。			
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	記憶力・記憶力低下の方については居室前に名前を貼るなどの工夫を行っている。リスクマネジメントを活用し、事故やヒヤリハットケースの改善策を環境の面からも考慮するようにしている。			